

スペインに学ぶ地域独自のツーリズム ——山口県民間訪問団ナバラ州訪問記

Encuentro con el turismo rural de Navarra, España:
Un recuerdo de la visita de 100 personas de Yamaguchi para celebrar el
500 aniversario de San Francisco Javier

安溪遊地*・安溪貴子**
Yuji ANKEI e Takako ANKEI

Resumen : (スペイン語による要約)

En mayo de 2006, 100 personas de la Prefectura de Yamaguchi visitaron Navarra, España, para celebrar el 500 aniversario de San Francisco Javier. Basándonos en la experiencia de una estancia de cinco meses en Navarra como profesores de intercambio en la Universidad Pública de Navarra, se propuso un tour opcional para realizar una visita a casas rurales de calidad de Navarra. Once personas, incluidos nosotros, estuvimos de acuerdo en llevarlo a cabo. El grupo estaba compuesto por cinco mujeres de granjas familiares, cuatro líderes de desarrollo local en Yamaguchi e nosotros. Así mismo, disfrutamos de la mayoría de las actividades oficiales con la delegación del Gobierno de la Prefectura de Yamaguchi.

Guiados por el Sr. Javier Brieva Yoldi del Instituto Técnico y Gestión Agrícola y el Sr. José Miguel Gamboa Baztán y Sra. Beátriz Sola del Departamento de Cultura y Turismo del Gobierno de Navarra, visitamos dos casas rurales en Izcue y Echarri justo a las afueras de Pamplona. También tuvimos la oportunidad de pasar una noche en una casa rural en Ochagavía, en los Pirineos. Cinco miembros del grupo alargamos nuestra estancia una vez terminadas las ceremonias, por el aniversario, para pasar otras 3 noches de visita en casa rurales de Urruska (Elizondo), Arrarats y Argiñaritz. En este último pueblo, famoso por su pan, una casa abandonada estaba siendo rehabilitada para abrirla como casa rural de bioconstrucción en un ambiente sin contaminación. Este caso era muy interesante, hemos descrito el estilo de vida y las opiniones de su propietario, Sr. Juan Luis Herrero, y su familia.

La segunda parte narra las opiniones de los miembros de nuestro grupo al terminar nuestra estancia. Ellos anónimamente opinan la importancia de las buenas prácticas en el turismo rural por parte de los Navarros y que nos proporcionan claves para el desarrollo de este sector rural en Yamaguchi. También advertían que no debemos intentar aplicar directamente los ejemplos de Navarra. De hecho, concluyen que debemos encontrar nuestros propios caminos para el desarrollo del turismo rural, que se complete haciendo uso de la riqueza cultural y natural propia de Yamaguchi.

La tercera parte es una breve descripción de nuestros esfuerzos en el terreno del turismo rural en Yamaguchi desde nuestro regreso. Estamos intentando intercambio con personas de Navarra para que visiten algunos de los frutos de nuestro trabajo en el desarrollo rural en Yamaguchi.

Nos gustaría agradecer al Sr. Javier Brieva Yoldi del Instituto Técnico y Gestión Agrícola y el Sr. José Miguel Gamboa Baztán y Sra. Beátriz Sola del Departamento de Cultura y Turismo del Gobierno de Navarra la oportunidad que nos brindaron de conocer casas rurales de interés. De igual forma, nos gustaría agradecer a la Srta. Montse Guerro del Aula de Energías Renovables de Aibar/Oibar por habernos guiado en nuestra visita al parque eólico de Izco. En último lugar nos gustaría agradecer a las numerosas personas e instituciones de Navarra que nos acogieron calurosamente ofreciéndonos su amistad y colaboración.

キーワード：ナバラ自治州、山口県民間訪問団、サビエル生誕500年、農家民宿、グリーンツーリズム

* 山口県立大学大学院国際文化学研究所教授
** 山口県立大学非常勤講師

1. 山口県民100人でナバラ州訪問

フランシスコ・サビエルの生誕500年を記念して、ザビエルの生誕の地、スペイン・ナバラ州を、山口県民約100人で訪ねてきました（参加者のそれぞれの報告は、山口県・ナバラ州友好訪問団実行委員会（2006）に収録されています）。

私どもは2005年度に半年間スペイン・ナバラ州に滞在しました（安溪・安溪，2006）。そのときの経験から、サビエル生誕500年記念行事に参加する山口県からの民間訪問団の実行委員会に安溪遊地が加わるとともに、ナバラ州のグリーンツーリズムとグリーンエネルギーの現状を視察して交流を図る人々を募ることにしました。呼びかけにこたえて下さったのは、山口で農家民宿などの「ふるさとツーリズム」が盛んになればいいと夢見る人々で、私ども二人を含む11人です。「グリーン会」と名付けて交流活動を始め、山口に戻ってからそのゆるやかなつながりをもっています。

ナバラでは、農家民宿や田舎別荘、農村ホテルなどが、カサルール（田舎の家）と総称されていて、補助金制度による推進体制を立ち上げて20年目にして、500軒を越える盛況となっています。当初からこの動きを推進してきたハビエル・ブリエバさんには、昨年私どもの案内をして下さった方ですが、今回も受け入れ準備で全面的なお世話になりました。

11名の内訳は、山口県の農業生活改善士として地域作りのリーダー的な役割をになっておられる秋本喜代子さん（宇部市小野，農家レストラン）、池田静枝さん（防府市，乳牛）木村ひろみさん（日置町，乳牛）、三嶋八重子さん（美祢市，肉牛）と、生活改善実行グループの山尾下枝さん（宇部市小野，水稻とお茶）のみなさん。さらに山口県でのグリーンツーリズムを始めと



写真1 オチャガビア村の農家民宿にて。左から石丸、木村、山尾、池田、福田、山本、三嶋、中山、安溪（貴）、秋本、安溪（遊）の面々

する地域づくりのコーディネーターをしておられる中山淑子さん（コミュニケーション技研）というパワフルな女性が6人です。残る5人は、山口市の「徳地づくり達人塾」のメンバーというご縁で、「ゆたかな串を育てる会」の山本彰治会長さんと、副会長の福田嘉夫さん（竹細工）、中小企業の活性化の仕事をされる石丸祐司さん（バーチャルカンパニー未来）。それと、この報告を書いている大学教員の私ども2人という構成でした（写真1）。民間訪問団としての全体のスケジュールが終わったあと、徳地作り達人塾の5人はさらに3泊して、農家民宿体験を深めました。以下ではそれぞれグリーン会短期・グリーン会長期と記します。短期は、2006年5月17日～24日、長期は5月17日から27日の旅となりました。

ここでは、その旅のごくあらましの記録と、前回の安溪・安溪（2005）ではスペースの都合で紹介できなかった、廃村に移り住んで自然素材の健康住宅づくりによる農家民宿の開業をめざしているスローライフ一家の紹介。さらに、現地での滞在の最後の日に、自由に感想を語り合った記録は、ナバラでの先進的な取り組みを山口の地で生かすための貴重な気づきの紹介。



図1 ナバラの位置



図2 ナバラ地図。斜線部は現在のバスク語使用圏

最後に、やまぐちの田舎が新しい滞在型の観光によって町との交流が進み、元気になっていくことを願う人たちの最近の活動の様子を、私どもがかかわった範囲内でご報告し、願いを共有するすべての方々気軽に読んでいただけるものとして、ご報告させていただきます(図1, 2)。

2. 10日間のグリーンツーリズム訪問日記

5月17日 朝4時集合、福岡・関西・ロンドン経由でマドリッド着。

18日 現代美術館でゲルニカなどを鑑賞後、バスでナバラ州へ。グリーン会のメンバーは、自分たちの農家レストランに生かそうと、食堂での昼食の写真を多数とりました。

19日 パンプローナ近郊の農家民宿を2軒訪問。案内は、農業局職員で、グリーンツーリズム開拓のために20年にわたり農家とともに汗を流してきたパイオニアのハビエル・ブリエバさんと、ナバラ州文化・観光局の担当者2人の合計3人がして下さいました(写真2)。1軒目は、パンプローナ郊外のイスクウェ(Izcue/Izcue 地名は、スペイン語/バスク語で表記)村でバラ栽培をするロレチェア(Loretxea)農家民宿で、この名前は、バスク語で「花の家」という意味です。バラの花を摘み、美しく香りがよいドライフラワーをお土産にいただきました(写真3-7)。すぐ近くのエチャリ(Echarri/Etxarri)村のセライ(Zelai)農家民宿も訪ね(写真8-9)、有機栽培のつぶらな真っ赤に熟したサクランボを木からもいで食べ放題という貴重な体験をさせていただきました。山口県立大学からの留学生で、農家民宿を卒論に取り上げたいという梶山亜衣さんもゆかた姿で参加しました(写真2参照)。

そのあと、旧市街区にあるパンプローナ市役所を表敬訪問し、昼は、パンプローナ市の招待で旧市街区内のホテル・マイソナベでナバラ州の観光大臣に迎えられ、ごちそうになりました。同席した大臣には私たちが書いた去年のナバラ滞在の報告書を手渡すことができ、お世話になったお礼をふくめて色々な意見交換ができました。みんなで折り紙を披露したりして楽しくすごしました。

午後はオリテ城を訪問し、夕食にはワイン醸造所でのナバラ州による歓迎パーティーという盛りだくさんの日程になりました(写真10)。

20日 第九を歌うメンバー以外は、貸し切りバスでグリーンな1日を過ごしました。

まず、ハビエル城まで車で20分ぐらいのイスコ風車

公園を訪ねました。49基の発電風車があるところです。コントロール室が、古い民家の形で造られ、実際に台所もベッドルームもあるところに、ナバラの人たちのおしゃれ心が発揮されています。案内役のアイバル村再生エネルギー教室のモンツェ・グレルロさんと知事を引き合わせました。二井知事は、「前にも一度来たことがあります、たいへん重要なとりくみだと思います。ナバラの人たちの環境への思いと努力に感銘を受けています」と言われました(写真11-12)。

ナバラの風車を山口にとというのが、県庁からのご一行の胸に浮かんだ着想のようでした。日本では風車を建てる際に地元と問題が起きる例が最近ありますが、ドイツでは、風車にとっての好条件のところと、渡り鳥などの自然にとって悪条件のところの2種類の地図をつくって、それが矛盾しないところを住民とNGOと行政で相談して風車を建てていくという方式をとっているそうです。みないたいところです。

風車公園をあとに自然の驚異・動植物の宝庫であるアルバユンの峡谷を経て、ピレネー山地の谷間にある美しい村オチャガビア(Ochagavía/Otsagabia)とロンカル(Roncal/Erronkari)を訪れました。オチャガビアでは、華やかで勇壮な伝統の舞踊で歓迎され地元の人々といっしょに観覧しました(写真13)。

この夜、グリーン会の11人は、他のメンバーの羨望の眼差しを受けながら、オチャガビア村に残って1軒の農家民宿に宿泊しました。その晩は、村の教会のおごそかなミサに出席し、そのあと、リンゴ酒の出る食堂で、地元特産の料理を自分たちで注文していただきました。隣のテーブルには婚約した2人とその両親、家族、友人が集まったお祝いの席になっていて、私たちもお祝いの言葉を述べて喜ばれました(写真14-19)。

21日 朝はオチャガビアのはずれの石畳道をゆっくり散策し、道ばたの花を見たり摘んだりしたあと、予約してあったマイクロバスに乗りこんでサビエル城まで移動し、改修が終わったザビエル城を見学したり、記念文化セレモニーや第九ジョイントコンサートに合流しました。そして場内での立食パーティーはザビエル村の村長さんとお話ししました。これがナバラでの最後の公式行事でした(写真20)。

パンプローナのホテルにもどってグリーン会全員ですごく最後の夜は、グリーン会の全体としての反省会で意見を出し合いました。これは、山口県のグリーンツーリズムの方向を考える上で貴重な意見が多かったので、ビデオからのテープおこしによって、後半に収録しました。

22日 短期の6人は、バルセロナで一泊して、往路と同じ経路で帰国の途に着きました(24日山口着)。

長期の5人は、レンタカーを借りてパンプローナを北に向かい、エリツォンドの町の西に広がるベルティツのお殿様の荘園であったブナヤカシの森を歩き、森の中で昼寝をしました。こんな旅のひとつに、心がひらかれていきました(写真21-22)。夕方、ナバラの農家民宿の草分けであり、リーダーでもある、フランス国境付近のベアルツン村のはずれのウルスカ農家民宿を再訪しました。シーズンオフで泊まり客は私たち5人だけでした。福田さん自作の竹とんぼをオーナーのお孫さん二人にプレゼントしました。両手に挟んですべらせて飛ばすのですがなかなか難しく、飛んだときには歓声がわきました。子どもたちは外に出ておじいちゃん(オーナーの夫)と練習していました。

夕食は自宅の野菜を摘んだサラダではじまりました。「この旅の中で一番おいしいサラダ」というのがご一緒した3人の男性の感想でした。次いでポタージュ、子羊肉のステーキとフライドポテトに地元の赤ワインとパン。快くいただいていると、デザートはいかが?と。果物の取り合わせ、プリン、ナバラ名産のクワハーダというヨーグルトのような食べ物から選ぶものでした(写真23-28)。

23日 朝起きると薪ストーブが焚かれるほど寒く、外は深い霧雨でした。春のブナ林を散策する予定だったのですが、あきらめて下山しました。低地は雨はなくその日はピレネー山脈を越えてフランス側のサンジャンピエドポールの町へ行き、田舎レストランで食事。非常に実質的で美味しく感動しました。食後、車がパンクするというハプニングのため、ガレージを探して右往左往しました。国境を越えてスペインにもどり、ロンセスバジェスの谷を通過して、パンプローナの北でエネルギー自給をめざすカーニョエチエ農家民宿に泊まりました(安溪・安溪, 2005)(写真29-31)。

24日 朝食をとりながら、東洋思想である風水に配慮した健康住宅の建て方の講義を、あるじのパッチ・ゴンサレスさんから受け、家を建てる前には、放射線と電磁波、マイクロ波の測定を行い、さらに地下の水脈があるところでは安眠しにくいので、水を探すという実演に参加しました。水脈探し専用のL字型に曲がった2本の金属の棒を両手に軽く持って何も考えないで無心に歩くと、水脈に当たった所で向きを変えるというものでした。歩いてみるとたしかに棒の向きが変わったので不思議でした。

パッチさんのすすめでパンプローナ市を通らないで、

アンデア山脈を越えて南下するという初めてのコースを走りました。山脈の上にどこまで走っても平らな放牧地が広がっていて驚かされました。その一角には森が自然公園として残されていることから、ほんとうはここは森だったんだということがわかり、ヒツジやヤギの草を食べる量の多さを実感しました。山脈を南に降りるにつれて森が次第に乾燥し、コルクガシなどの常緑カシの森になり、麦畑が眼下に広がって、やがてパンプローナの西、去年訪れたアルギニャリツ村に到着しました。

この廃村の村おこしの過程と自然住宅の建築家であるファン・ルイスさんの取り組みは非常にユニークなものなので、2005年の滞在経験を含めて、この次の節で紹介します(写真32-33)。

この夜は、パンプローナ旧市街の有名なバル「バセリア」で、名物のおつまみピンチョなどをつまみました。山口県立大学からの学生や、ナバラ州立大学から県立大へ行く予定の学生なども参加してにぎやかな集まりになりました。

25日 バスでパンプローナ発、バルセロナへ。おそい昼食は、中華料理屋で箸を使っていたのしみ、その後サグラダファミリア教会を訪ねました。

26日 午前中、バルセロナの中央市場を訪問。スペイン第2の都市の胃袋を支える市場の活況とそのあざやかな色合いに一同魅了されました。バルセロナ発ロンドン・関西・福岡経由の便にのって、27日夜無事に山口に到着しました。旅行のアレンジをして下さった国際交流協会では、私たちの到着を明かりをつけて待ってくださったのには恐縮しました。多くの方々のご尽力で、事故もなく旅を終えられたことを心から感謝いたしました。

3. 事例紹介——建築士ファン・ルイスさん一家がとりくむスローな民宿づくり

ファン・ルイスさんとは、サビエル城からほど近いアイバール村で出会いました。2005年の6月に開催された「自然エネルギーとグリーンツーリズム」というセミナーの時でした。まず娘さんのサラさんが話しかけてくれました。日本人と知って「玄米正食(マクロビオティック)のオオサワジャパンを知らない?」と聞かれたのです。「オオサワジャパンなら知っているわ。パンプローナでもその食材を手に入れる事ができてとても助かっているの。豆腐とか味噌とか玄米とか。私は日本ではお米を自分でつくって玄米で食べているの」。サラさんは「私も畑仕事をするのが好き。母がつくっ

ているの。でも今は父と家造りをしていて、ほら手が豆だらけなの」と豆で固くなった手を見せてくれました。一見きゃしゃに見える若い女性サラさんの手の豆に、私は自分たちの生き方と近いものを感じて話しがはずみました。

それは勉強会の一環として、有機ワインの酒蔵で試飲会の時でした。大きな試飲用のワイングラスに深い赤紫色のワインが注がれます。ボルドーにひけをとらない深みがある味わいで、お値段はずっとお得というナバラワインです。小さい酒蔵ですがレベルの高いワインを造っています。これは去年のもの、こっちは……、と次々と樽を巡って飲ませてくれます。試飲の仕方も専門家にしっかり教えてもらいました。

サラさんは、「私今日は飲めないの。父の運転手で来ているから」といいます。サラさんの父ファン・ルイスさんは健康住宅・自然住宅の建築士としてこの集まりに参加していました。「ねえ、家に遊びに来て。パンプローナからそんなに遠くない山の中よ。歓迎するわ。父も母もきっと喜ぶわ」「そんなこと言うと、私たちは本当に行くわよ」「ええ、来て来て。」

この約束は2ヶ月後、遊地が左ハンドルの車を自分で運転できるようになって果たされました。地図をたよりに探してみれば、サラさんの住むアルギニャリツ村は、山の中の孤立した集落でバス路線もないところだったからです。

サラさんのお父さんのファン・ルイスさんは建築士としてパンプローナで活躍してきました。インドが大好きで、家族で毎年のように出かけているといいます。髪を伸ばし髭を蓄え、日焼けしていて風貌もなにかインド化しています。アパートを売り、建築事務所をたたみ、そのお金で、パンプローナから車で30分ほどのアルギニャリツという小さい村に移り住んだのです。

「10年前ここは廃村だったんだ。13世紀ぐらいにできた古い教会があったりして歴史もあるここを廃村にするのはもったいない、なんとかしたい、と州政府から言われて私たち一家がまずここに移り住んだ。その時は電気もなくて、ほらあそこにある小さい風車の風力発電なんかで電気をまかなった。人が増えて定年で帰ってくる人も出はじめて、今は電気も来ているけれどね」とファン・ルイスさん。

「わあ、たいへんだったんですね、日本でも廃村になった所に住み始めて、今ではすてきな村になっている所があります。私たちの友だちもそこに住んでいますよ」と、屋久島の白川山（しらこやま）や、山口県阿武町でいま進められている「あったか村」づくりを思い出

して話しました。「日本でもそんなことがあるんだね」と互いに近いものを感じた気がします。「それに、ぼつんと孤立している山の中だけど、パンプローナから車で30分でしょう。私たちも山口市の中心から30分の山の中に住んでいます」。

山の斜面に南向きに家が数軒建っている。他の家の庭先を通り抜けるのが近道で、一番下の家がファン・ルイスさんの家です。「古い家を私が改装した家なんだ。化学物質なんかの危ないものは使わずに、またエネルギーもできるだけ自然のものを利用できるように工夫したんだよ」と説明してくれます。入り口は天井も窓もガラスのサン・ルームになっていて、夏はよしずをかけて涼しく、冬は日だまりであたたかいしかけです。中にはいると奥さんのクリスティーナさんが「ちょうど、お料理をするところなの。いっしょにご飯食べない？」ときそってくださいました。献立は野菜たっぷりの玄米のチャーハンです。オリーブ油で野菜を炒め、炊いてあった玄米のご飯を入れ、醤油で味付けをしました。付け合わせは生のキュウリです。肉食をしない、魚は食べる、というベジタリアンの一家です。天井からはローリエやセージ、ローズマリーなどのハーブが下がっています。「私どもも山口ではもう15年ぐらいずっと田んぼを耕して、そこでとれる無農薬の玄米を食べていますよ」。クリスティーナさんはパンプローナに住んでいるときは玄米正食の自然食品店を運営していたのだそうです。ご飯のあとで案内された倉庫にはゴマやごま油、葛粉、醤油、味噌、すり鉢、すりこぎ、などが置いてあって、今でも仲間でわかるために、醤油は一斗缶で仕入れていると聞きました。

「お茶を飲まない？パンチャをいれてくださらない？」とクリスティーナさん。出てきたものは日本製の三年番茶でした。お湯をたっぷり沸かして土瓶に番茶を入れました。スペインの田舎で番茶を入れるなんて、思ってもみないことでした。

「家の中を案内しよう」とファン・ルイスさん。彼の手作りの家です。家はプラスチックを使わず、木と石とレンガと漆喰からなっています。柱や家具に木がふんだんに使っており、天井を見上げると日本のわが家にそっくりです。二階に上がってわかりましたが、我が家の力天井と同じ構造になっていて、二階の床が一階の天井になっているのです。

入ってすぐの居間と台所、壁を隔てた奥の仕事場との間の壁に薪ストーブがはめこんであります。一つのストーブの火が3つの部屋から見えるようになっている不思議な薪ストーブで、しかもこれは料理用ストーブ

ブをかねているという優れたものです。ストーブの熱が壁の中を通過して循環し、それが厚い壁全体をあたためて、わずかの燃料でも芯からあたたかいという仕掛けになっています。大量の薪が必要な我が家からみればうらやましいようなシステムです（写真34-40）。

台所は棚がたくさん作りつけてあって、棚に扉はなく、カーテンで被ってあります。箆に皿や道具を入れて整理した簡素なものです。壁にはカラフルなタイルを使っています。

居間は木の机と椅子があって食事などをとる部分と、大きな古い梁をそのまま再利用してソファのようにした、くつろぎの部分からなっていて、天井からブランコのような椅子が下がっています。奥は染め織りや縫い物をする作業室になっていて、サラとお姉さんの二人の娘の作品が並んでいます。突き当たりは書斎で建築士ファン・ルイスさんの仕事場です。居間の壁にそって階段があって吹き抜けになっています。2階はそれぞれの個室兼寝室です。と言ってもベッドではなくマットレスを置いただけのすっきりとしたものです。トイレ兼シャワー室もあります。扉は重厚な木です。ブラインドにすだれのような竹が使っており、籐の椅子や箆があるのは、インド好きだからかもしれません。

家の周りには庭があり、果樹と野菜が少しづついろいろつくってあります。「屋根に降る雨を溜めてそれを畑の水やりに使います。今年（2005年の夏）は干魃で野菜はあまりできなかったの。」とちょっと恥ずかしそうにクリスチーナさんが言います。家の周りの木々の木陰にはハンモックが吊ってあります。ここで昼寝するのは贅沢な楽しみでしょう。あとで遊地が昼寝をしていると子猫がはいってきました。ハーブも石を組んだ庭に植えてあり「そこはサラが手入れしているの」とクリスチーナさんが言います。タイムが花をつけていました。この乾燥気候ではハーブがよく育つし、昼寝の時に蚊も少ないようでした。

「馬を見せよう」とファン・ルイスさん。家の下の斜面に柵がしてあり、呼ぶと馬の親子が駆けてきました。水が入ったバケツを持つルイスさんの後をついてきます。馬がやって来ました。餌と水の容器が置いてあって、渡すと干魃で草はほとんど枯れています。「ここは水が手に入りにくいというから、馬たちも世話をする人も大変そうですね」というと、「もっと水が足りないときには政府が給水車で水を届けてくれ、村の給水タンクにためておくシステムになっているので、水道が止まることはないのです」という返事でした。

ルイスさんは、この村でもう1軒の家の改装を手がけ

ています。サラが手に豆をつくっているという家です。完成すればサラが住んで農家民宿としてオープンする予定だそうです。見に行くと、古い家を100万円ほどで買い取って、半ば解体し改装中でした。窓を広くし、屋根を上げて屋根裏を居住空間にし、断熱材として日本ならプラスチック製品を使うところにコルクの板を入れたり、屋根の下のルーフィング材も、アスファルト引きのシートではないゴアテックス風のものを使っていました。健康に配慮した住宅として建築士のルイスさんの知恵と工夫を凝らしていることに感心しました。しかしまた、石を積み上げていく構造に、地震のない国の家づくりだなあと驚かされました。

2005年9月、日本への帰国の準備に忙しい朝、新聞でファン・ルイスさんの住むアルギニャリツ村が山火事の被害にあったことを知りました。驚いて電話すると「もうだいじょうぶ、みんな無事だったよ。一時は煙が充満したので、馬を連れて避難したよ。」という返事でした。それどころか「いま健康住宅づくりのセミナーが始まっているからぜひ見にいっちゃい。サラも会いたがっている」というおさそいが返ってきました。

時間をひねり出し、引っ越しで残った日本食材や道具、健康食品などを引き受けてもらおうと、火事見舞いを兼ねて出かけることにしました。

電話をしてから車を飛ばすと黒く焼けこげた山々が目に飛び込んできました。でもルイスさんたちの集落までは火が届かず消し止めることができたようです。「みてごらん、マツ林の所がまるで飛び火するように焼けたよ」とルイスさん。確かにマツ林の部分が黒くパッチ状に焼けてカシ林の部分は残っていました。火は南の方向から伸びて来て、集落のすぐ下のマツ林まで及んでいました。

「いいところに来たわ、手伝って。今からセミナーの人たちの食事なの」とクリスチーナさん。家で作った料理を、公民館のようなセミナー会場まで運ぶところでした。料理や水が入った包みをかかえて会場に着くと、ルイスさんが帰ってきて食事が始まりました。自然住宅建築の理論と、今手がけている農家民宿の建築現場での実習、さらに近所のプエンテラレイナ（女王の橋）という巡礼の要所の町並みに出かけての古建築の勉強など、もりだくさんな内容に加えて、クリスチーナさんの手作りの自然食の食事がセットになったセミナーなのです。定員は8人ですが、このときは家を建てたいと希望する女性2人が受講生でした。それでも赤字にはならない値段設定で、5日で一人4万円

程度ということでした。

お料理は完熟トマトの薄切りに塩とオリーブ油、タマネギとハーブを散らした前菜から始まりました。全粒粉のパンと赤ワイン。主菜はズッキーニ、ピーマン、ジャガイモなど夏野菜のグラタンでチーズとオリーブ油がたっぷりです。デザートは大きなプリンです。ここで私たちは和菓子を出し、貴子が抹茶を点てました。クリスチーナさんに茶筌と抹茶（無農薬）をプレゼントしようとしてきていたのです。

お抹茶のふっくらとたった緑の泡、茶筌の竹を使った繊細な細工、砂糖は加えず甘くなくむしろ苦いお茶であること。日本の伝統文化と自然食が話題になりました。ルイスさんのお話を聞いていて、山口県産材で建てた私どもの在来工法の家の考え方や匠の技と、ルイスさんがセミナーで教えているスペインの健康住宅の考え方や技術がそう遠くないものだと思われました。

さらに、自然住宅づくりや村作り、安心安全な食材を使ったおいしい食事を通した環境学習というアイデアは、あったか村や、県立大学の地域連携授業で生かせるな、と感じました。（その結果、2006年度は、あったか村の村づくりのメンバーを中心に、県立大学の環境問題という授業で、健康な住宅づくり村づくりのお話しを地域の人たちが主体になって話す、という企画が実現しています。）

こうしてスペインからの出発の前日に2回目の訪問をした私たちは、ここを再び訪ねようと心に決め約束をして帰りました。その約束を果たすために、2006年の旅でグリーンツーリズムの交流をする班として、5月22日に本隊が帰国するのを見送って、残った5人でアルギニャリツ村を訪ねる計画をたてたのでした。

ナバラ州の道を車を運転して動き回るのはかなり大変でした。慣れない右側通行の上に、道を曲がるのに信号ではなく、ロトンダという円形の道を回りながら目的の道路に入ります。スペイン語の道路標識を読むのに時間がかかるのに、走りながら曲がるとき目的の道路がどれなのかを瞬時に判断しなければなりません。

廃村の歴史をもつほどに、人里離れた所にあるアルギニャリツ村への道はわかりにくく、道に迷いながらもなんとか到着しました。ファン・ルイス、クリスチーナ夫妻とサラの3人がむかえてくれました。今は5月、去年とは変わって畑には青々とした野菜が育ち、サクランボが稔っていました。子猫が生まれていたこともなんだか春を感じさせました。

お願いしてあった昼ご飯を一緒に食べます。ベジタリアンの献立です。大きめのかりっとしたクルトンが

入ったスープ、そして庭の野菜のグリーン・サラダはもちろんオリーブ油たっぷりです。次に出てきたメインの料理は肉入りパイにも似ています。聞くと、大豆タンパクで造った素材を使っているということでした。そしてデザートはケーキとお茶。緑色のミントが映えます（写真41-43）。

食事のあとは庭に出て子猫と遊び、サクランボをもちいで食べました。「どんどん食べて。鳥と競争なんだから」とはげまされました。そのあとサラたちが建てている民宿を見に行きました。9ヶ月前から見ると屋根がはられ、内部の整備もはじまっています。きれいな絵が描かれたタイルがつんである部屋の片隅でサラが「このタイルを割って」「えっ！こんなにきれいなタイルを壊しちゃうの？」「そうよ」。実は風呂やトイレの壁にサラはタイルをモザイクで埋め込んで「世界でたった一つのトイレ」をデザインしているところだったので。わけがわかった私たちはひとりずつ金槌をにぎってタイルを割ることになりました。とはいえかわいい絵をこわすのはかなり抵抗を感じました。それにしてもこの民宿ができあがったら、その眺めは、カシヤマツの木々に覆われた山並みの、遠く向こうにプエンテレイナの町並みを望む雄大なものになります（写真44-48）。

4. 11人で何を学んだか——短期コース滞在者の座談会

2006年5月21日、パンブローナのホテルのロビーで、反省会を催しました。参加した11人が石丸さんの司会で自由に感想を述べ、安溪遊地がビデオ撮影と文章化をしました。

地域全体で利益があがるツーリズム

山本「山口市徳地の串からきました。今回参加させていただいて、農家民宿に一晚泊まり、いろいろお話をききました。これは大変参考になりました。特に昨日オチャガビアで解説してくださった方のお話を聞くと、実によく考えておられるな、という気がしました。私もこれからいろいろ取り組みたいと思っていますが、先進地というか、きちんと利益があがっていて、しかも地域全体がその方向へ向かっているし、大きな利益を得ているところをしっかりと学びたいと思っています。私たちのところでも、過疎と少子高齢化が急速に進む地域の中で、経済的にも厳しい中で、地域の特徴がなんとか出せばいいなあと思います。こういう情報をしっかりと得て、それをもとにしっかりと考えて見

たいと思っています。』

安溪（貴）「徳地型の農家民宿を模索したい、ということでしょうか。」

山本「そうですね。これまで九州とか山口の近辺の民宿を訪ねて、いろいろなお話も聞いています。山口県のグリーンツーリズムが目指す方向も、冊子にして出しておられるから、だいたいのことは分かっているつもりでした。しかしそれが実際に手引き通りにやることができるかということ、できるものじゃないですね。そのままじゃとうてい使えない。他所がうまくいっていても、それをそっくりまねてもうまく行くはずがありません。その点では、昨日聞いた話とか、今回の見聞は非常にいい勉強になったと思います。山口県内で考えられているものといろんな面でちょっと違うと思うんですね。だから、地域にあった、地域で受け入れる人があまり大きな負担にならないような、しかもよそから来られる人に魅力がある、そういうものを見つけないかぎり、私たちの農家民宿なりグリーンツーリズムというのは、成功しないんじゃないかと思えます。実施したとしても1軒か2軒、多くても4、5軒というようなことでは、地域全体にとってたいした意味がないと思います。日本の農家民宿は、九州の安心院（あじむ）なんかに行ってみても、その家の奥さんの魅力というのがすごくあります。その人の魅力で繰り返し繰り返し訪ねているんですね。安心院は農家民宿が多いようでも、私が行った時は13軒しかありませんでした。そうではなく、昨日行ったオチャガビア村のように、600人しか住んでいないけれど30軒もの民泊がありますよ、というものでなければいけないと思います（注、2006年6月には、安心院の農家民宿は26軒に増加しています）。』

素晴らしい自然と気軽なおもてなし

安溪（遊）「大変深い話がトップから来ました。次は、池田さん。さっきレストランで、『お水ちょうだい!』と日本語でおっしゃったら、さっと水が来ました。びっくりするほど通じますよね。安心されましたか?』

池田「スペイン語を全然しゃべれないので、はじめはすごくショックだったけど、逆にね、日本語を教えてあげようと思って（笑い）。それもありがたかな、と思いたしたら旅が途中から楽しくなってきたような気がします。スペインに来て大自然がきれいなのに、ほんとに

驚きました。あんなにきれいなとは、想像できてなかったです。バッグの中に入れられるものなら、ちょっとコンパクトにまとめて、日本に持って帰りたいような気持ちです。そして持って帰ったら、ドラえもんじゃないけれど、ぱさっと広げてね（笑い）。孫がいつも、『おばあちゃん、ドラえもんがほしいね』と言ってるけどね。それができるのならしたいくらいうらやましいと思いました。私の牧場では、県立大生さんもちょっと来られましたが、高校生や農大生さんも一か月ほど研修で宿泊されます。来られて満足して帰っておられるのかがすごく疑問でした。どんな風に受け入れたら満足してもらえるのか、よくわからないまま受け入れてきました。ですから、このたび直接見せていただいて、すぐに参考になりました。来てよかったと思っています。わが家は、都市型の酪農家ですから、スペインとはまったく違うんですね。子どもが出て行ったりすると、大きな家ですからだんだん部屋が余ってきます。このへんで、何かヒントになることもあるかな、とちょっと、思いました。』

安溪（貴）「ここの特徴は、お客さんに提供するスペースと家主と家族の生活空間をちゃんとわけて、住みわけているところだと思います。そういうことが日本でもできれば、農家民宿をしてもすごく楽だろうと思います。』

池田「1か月間生徒さんを預かるというのは、食事でもなんでも大変なことがあります。でも、炊事場をもう一つ別にすれば、『あなたたち、今日はここで作ってたべなさい』ということもできるでしょうね。そうすれば、こちらが楽で、子ども達にも楽しい場面があるかもしれない、ということをちょっと感じました。』

地域の負担が重くはだめ——宇部市小野での20年の挑戦から

秋本「宇部市小野から来ました。農家生活改善士会にも入っております。やまぐち農山村女性ネットワークの代表もしています。平成10年には、北欧の方の視察に行きまして、ドイツでは民泊の経験もあります。フランスまで足を伸ばしました。ですから、このたび、グリーンツーに参加させていただいて、もちろん、安溪先生ご夫妻にずいぶん助けられています、わりとすんなり来れたかなと思います。小野では、直売コーナー、それと輿割漬（こしわりづけ）という商品の製造販売をして20年になります。平成9年からは、食堂

もやっています。小野は人口2000人弱の地域ですが、食堂のない所だったので、地元の要望に答えて食堂を始めたわけです。週2回、火曜と木曜の営業ですが、これまでのところ赤字も出さずにやっております。今後、地域をどういうふうに活性化していくか、というのが大きな課題です。平成20年に小野湖のほとりにオープンする予定のスポーツと環境教育の施設の中の直売所をまかされることになっています。80人の子ども達が滞在して、農業体験をしたりできる施設として計画しましたが財政もきびしくなり、定員40人に減り、炊事も私たちのグループが提供することになっていたのが、見直しになり、平成20年には間に合わないという意見が出たりしています。年に2回ほど農業体験をしてもらう企画をしてきたので、今後は、農業プラス観光という形だと思っています。民泊の時に案内の男性が言っておられましたが、農業+観光ということをテーマに考えて、都市の人たちに、自然の豊かな農村部に来ていただく。さっきも出ましたが、地域の方には負担が重くて苦しい中での農家民宿では続かないと思います。マンションで暮らしの人が小野に来られて、『ここで家を一軒丸ごと借りて住みたい』と。高齢化して人が住まなくなった家もあるので、そこに丸ごと住んでいただくといいと考えています。欲を言えば、小さいお子さんを連れた方だともっとありがたいです。小学校が10人を切っていますから。ですからスペインでも農業後継者がいなくて衰退するという事情は同じだな、と思いました。民泊や教会はドイツで廻った時とだいたい同じでしたから、それほど驚きはありませんでしたがいろいろと勉強になりました。』

悩みはどこも深い

白井博文「山陽小野田市の市長です。旧山陽町の方は、後継者のいない田んぼの中に空き家がずうっと空いたままあるんです。どんなふうにしたらいいのか、知恵がないんですよ。安溪先生あたりに、そのうち知恵を借りに行こうと思っていたんですが、今通りがかったらけっこういいお話が聞けそうなので、もうしばらく傍聴させてください。」

一同「どうぞ、どうぞ。」

中山「たまたまですが、山陽小野田市の合併後の憲章を今まとめているところですので、よろしく願います。」

宿ごとに理念をもって独自の工夫を

中山「下関から来ました。仕事は、都市計画、博物館

や文化施設のプランニング、企業や行政さんを元気にするための企画などをやっています。10年ぐらい前から、里山活動とか環境教育とか、第一次産業にとっても魅力を感じていて、地域に入って勉強させてもらっているところです。今回参加させていただいての感想ですが、『グリーン会でよかったなあ』というのが正直なところです。いい旅の道連れに恵まれて、刺激を一人ひとりから受けることが多かったし、みなさん、私をもっとも尊敬する、地域の現場で活躍されている方たちなので、そういう方々から生の声が聞けたのが貴重でした。安溪先生に素晴らしい企画をコーディネートしていただいたので、一つひとつが勉強になりました。ナバラ州のグリーンツーリズムについてですが、カサルルーラルを経営しておられる一人ひとりが哲学というか理念をもっているというのが、とても素晴らしい。それがあるから、自信をもってやっていけるということがわかりましたし、なおかつ深く現状の認識ができていて、だから、こういうことが必要だとわかっているし、自分たちのやっているものが、単なる宿泊施設ではなく、地域づくりと深く結びついていることを一人ひとりが認識していると思います。とかくグリーンツーリズムは、直売と農家レストランに宿泊の3点セット。そのことに重点が置かれがちですが、ナバラ州の場合は、そうではなくて理念の方に力をおいて、奥さんとか携わっている家族がとてもイキイキしています。それは自分の生き方に沿う仕事をしているからだと思います。そこが山口県のグリーンツーリズムが学ぶべきところだと感じました。私たちは、流行としてのグリーンツーリズムではないものを見せていただいた。とても地に足がついていた。それを、私たちが何らかの形で山口県の中にメッセージを出して行かないといけないですね。このまま流行とか、ひとつのトレンドみたいな形で終わってしまったら、何の意味もないんだなあ、と思いました。』

仲間ができた。交流し発言しよう。

中山「一人の目で見ると、私の個人的主観になりがちだけれど、11人の目で見たとすることは、11人の人たちのそれぞれの意見を、同じ時を過ごしながらも違う経験をしているわけなので、11人の目が集まれば、いろんなことがみえてきます。今までの山口方式に上乗せしたかたちで、ちゃんと仕事になったり、ちゃんと地域づくりになったり、次の世代がそれを受け継いで、環境を守ることになったり……。というのは、野菜とか、無農薬で、地域全体で、どうやって環境を守った

らいいのかとてもよく考えられていたと思います。そのあたりのことは、私もレポートに書きながら、もう1回整理してみたいと思います。今回、ただでコーヒーが飲めるところが、10軒ほどできた、という気持ちでおります。とくに、県立大学には、研究室にも喫茶店ができたと思っています（笑い）。今後ともよろしく願います。』

安溪（遊）「どンドンいらしてください。ご自分でコーヒーでもなんでも入れて、だべって若者たちを励ましてくださいませね（笑い）。』

まねをするのでなく土地柄を生かす。

山本「今の中山さんの意見には、同感です。めざすところがはっきりしている。昨日の民宿の女主人やガイドの男の人の姿をみて、そう思いました。そうしないと、ごく一部の人がしかできないことになってしまうんですね。そうでなく、どこの家でも取り組めるような、ものに通ずるんじゃないか、とあって、同感しました。』

秋本「スペインの土地柄があり、あの村の特長をいかしてできていることです。あれをそっくりそのまま山口のそれぞれの地域にもって行こうとしても、それはできませんよね。その土地にあったことをやっておられるその姿勢を学ぶべきで、やっておられることまねはできません。』

行政はハコモノより地域の環境づくりを

三嶋「美祢市からきました。今回、みなさんとごいっしょさせていただいて、本当にいい旅ができたなと思います。美祢でも後継者不足で、空き家が多くなりましたし、また農業においても集落営農にとりかかっております。私はその役員として、これからどんなやり方をしたらいいのか悩んでいます。これまで、生活改善士会で地域のマップづくりをして、それを通して地域を見直そうと考えて地域の方に意見を聞いて地図を作りました。ところが現在では、道も大きくなり、集落排水、圃場整備等も完備できて、昔とはまったく変わってきました。それでこんどは、それを反映したマップづくりをしようと今、第二のマップづくりをしております。でも、実際に集落営農で動ける労働力はわずかで、後継者不足で一番悩んでいます。後継者が少ない中で、県は加工所をつくったら何をしたら、と計画をおっしゃいますが、設備投資をして、ハコモノを作ってみても、跡継ぎがなかった時、やはり責任者と

してどうしていいかわからない。いま必要なのは、ハコモノよりも地域の環境づくりだと私は思っていました。このたびの訪問で、いろんな地域の美しい村の環境をみせていただき、ホームステイも経験させていただきました。民宿のあの受け入れ体制。すんなりと気楽に入って行けましたね。これがすばらしいと強く感じました。地域の将来については、私なりに考えないといけないのですが、みなさまにお会いできて、いろんな方の知恵とかアイデアをいただきながら、進めていきたいと思っています。みなさまにご指導をいただきたいと思っています。私が住んでいる所はお年寄りが施設に入って行かれて空き家がだいぶ出てきました。その空き家をインターネットに載せて借りてもらうという試みで、いま地域に入ってこられた方が何軒もあり、『あなたのところの集落は人口が増えた』といわれるようになってきています。こういった良い方向に進めるには、地域ぐるみで取り組んでいかなければならないと思っています。』

山林を生かすことは世界共通の課題

福田「山口市徳地の串から来ました。今回は竹トンボを作って持ってきました。私のところは、標高300メートルあって景観はいいです。こちらに来て古いものを大切にしていることに感心しました。このあたりでは昔は一階に牛を飼い、天井裏に牛の餌のワラを詰めて人間は中間の2階に住むことで自然の暖房と断熱を利用してたと聞きました。しかし農業衰退で後継者がおらんという状況。その中で活路を見つけたのが、今回の民泊、農家民宿ですね。日本の現状とまさに似ていると思います。林業にも農業にも、聞いた話の中に共通の問題があるな、これは世界共通の課題だなと思いました。私も田んぼはあるのですが、他人に貸して耕作してもらっています。山は貸さずにありますが、これを町の人に田舎を体験してもらう場にできないかと考えています。ノコでも鎌でも、使ったことがない人に山での仕事を体験してもらおうと、山の現状に興味をもってもらえるのではと思います。徳地では森林セラピーが始まりましたが、これがひとつの目玉になるのではと期待しています。農家民泊とか林家民泊とか、それを越えて『土地を提供します。木を伐って好きな家を建てて住んでください』これがひとつの理想だと私は思います。それは無理としても、地元でとれた野菜・米を使って暮らしを楽しんでもらう。そういう形ができたなら理想的じゃないか、と今回参加させてもらって感じました。』

みんなを引きずり込んで第三の人生を楽しく

木村「日置（へき）の標高250メートルのところに住んでいます。山の中に2集落ありますが、隣の集落に特別養護老人ホームと温泉施設ができて、うちにはなんにもない、という環境の中にあります。それはさておき、畜産業をしており乳牛を飼っています。それから出る堆肥を使って、こだわりの健康野菜を作っています。夢はこれを生かした農家レストランです。きのう民泊をして、ああいうやり方、ああいうかわり方で人を呼べるんだったら、受け入れ側も楽な気がします。そこにいる人がいっしょにいて、そこにある色々な物を発信して、来た人たちに受け止めてもらってというやり方に、大変通じ合うものがありました。こうすれば楽だろう、広がりがもてる、と二通りの感じ方をしました。今は家業がありますが、家業を卒業したらどっぷりと飛び込んでいけるかなと思います。第三の人生としてその方向へ夫を引きずり込んで、他人（ひと）を引きずり込んで、そして行政も引きずり込んでね（笑い）。行政の方には、こういうものがしたい、ああいうものがしたいとちらちらちら見せているところです。行政はお金がないから『自分たちできっちりした組織をつくって申請してください。そうすれば、なんとか補助金をひっぱってきて、応援はできます』と。自分の家が元気になり、集落が元気になる。隣の集落も若い者が全部出ており過疎ですから、後継者がいる家は2軒だけです。ですから、私も含めて年寄りが寄り添ってみんなで元気になっていけばいいと思います。そのために少しずつ意識を同じくするものを自分が出して行けたらと思います。今回参加できたことを大変うれしくおもっております。』

いくつになってもがんばれる限りがんばって

山尾「秋本さんと同じ、宇部市小野から来ました。このたび、たいへん良いお勉強をさせていただきました。秋本さんから声がかかりまして、秋本さんが手作りグループのグループ長で、私は足かけ9年そのグループの食堂の責任者ということでやっておりますが、私も年を取りまして、みんなも年をとりましたので、今若い人に変わっていただいたところです。でも、前の人も時々は出てくださいますとおっしゃいますので、月に2回ぐらいはお手伝いに出しております。私どもの集落は、平成16年、17年の2年間で基盤整備をしまして、それが終わりましたので、一枚の田んぼも広くなり、道路も広くなったんです。よくなったからみんなががんばっ

てやろう、というておりますけれど、だんだんお年寄りの方が多くなり、みんなで助け合って行こうと営農組合を作って、請負耕作というのもやっています。請け負われる人は一人で3町5反、4反ぐらい作られるんです。おかげで、今のところどうにか安定はしております。私は、水稻を1町つくり、お茶を1町2反作っておりますが、年は70をずっと越しております（笑い）。今からもできるだけがんばって行こうと思っております。秋本さんがやっておられます、あすなる食堂もできる限りお手伝いをさせていただこうと思っております。』

20年はずっとお世話する人が必要

石丸「防府市の徳地よりのところから来ました。実は、こちらに来る前に、山口大学の観光が専門の先生に電話で聞くと『観光で儲かっているところは日本にはない』と言われたんです。これは、地域にはお金落ちない、ということらしい。では地域にお金がまわっている観光地はと尋ねたらスペインだといわれたんです。それで、スペインで地元が儲かっているのはなぜか知りたいと思って来ました。私は中小企業の支援をしています。企業でも同じことで、実際に取り組んでいく人と、もうひとり要ると思うんです。二人目とは、ずうっと根気よく支援をし続ける人です。最初の日にお安溪先生から紹介された方、ハビエル・ブリエバさんほか3人おられましたね。非常に熱心だなと思いました。そういう人がどうしても要る。それから現場でがんばるみなさんのような人が要る。がんばる人が一人出れば、それを見てまたがんばる人が集まってくると表現されました。ですから、行政でも企業でも農業でも何でも同じと思うんですが、中心になって引っ張る人とそれにうまく乗っかって実現してくれる人という組み合わせが実はいるのかなと思っています。企業では浜松が非常に元気です。30年ぐらいやっておられる人がいます。高知の山の中で柚子を売っている馬路（うまじ）村では、行政で20数年やっている人がいます。ああいう人がどうしても要ると思います。我々は徳地で『とくぢづくり達人塾』という活動をはじめました。安溪先生が塾長で、われわれはサポーターという役割をやってきて今年3年目ですが、もう（店じまいの）相談をはじめているんです。徳地町が山口市に合併した影響でしょうけれど、30年はやってほしい。少なくとも20年はやらなければだめじゃないかと思うのに、もうスローダウン気味です。なかなか大変だな、と実は思っております。』

安溪（遊）「徳地町が山口市と合併しても地盤沈下しないように、新山口市と県立大学の提携を結び直して、学生たちが積極的にかかわれる環境をつくる必要があります」と考えています。山口市には限りませんけれど、みなさん、今後ともよろしくご支援をお願いします。」

都会の人の気持ちにそった気楽なサービスを

石丸「非常に勉強になりましたのは、われわれどうしても完璧を求めるところがあります。完璧な準備をしてお客を迎えようとはしますが、今回民宿に泊まりましたけれど非常に気楽でした。接待もそれほどではなく、夕方お茶とお菓子をちょっといただいて、翌朝は朝食の時にいい感じで朝食をごちそうになりましたけれど、ごく限られた時間に接触することで、なんとなく満足が得られる。我々がやろうとすると、つきっきりで面倒をみななければいけないじゃないかと思ってしまう。そこを我々は見習ったらどうかと思いました。私は都会に長くいましたけれど、都会の人と田舎の人は全然違います。都会の人は自分が入りたいグループを探して行く。田舎の人は好き嫌いに関係なく、そこらへんにいる人をグループの中にひきこんじゃうんです。それを都会の人に対してやったのでは、いい迷惑だと受け取られるおそれが強い。そういう意味では、我々がターゲットとする人たちに、どういうサービスがしてほしいのか、もう少し聞く必要があると感じています。前に読んだ本に、奈良の大仏さんが焼けて100年間再建されなかったそうです。そうしたら、奈良の大仏さんの顔がどんな顔だったかわからなくなっちゃった。それで、どういう顔にするか、というので、竹籠を編んで紙をはって実際の高さのところに揚げて、どのお顔がいいか、人気投票をした。どのお顔が仏様らしいか、もっとも心がやすらぐか。今はそのお顔になっているんだそうです。このように、われわれの所によびこもうとする人たちの意見をもう少し聞いてみて、その人たちがこうしてほしい、と思っていることを勉強する必要があると、そう感じながら、民宿を体験しました。」

プライベートはまもりつつ手をつなぎ交流する

安溪（貴）「山口県の各地からこられたみなさんが、それぞれの現場で強い思いをもって取り組んでおられる、その内容が伝わってくるお話で、この旅をきっかけに、それらの活動や人をネットワークとしてつないでいくことができるかな、と今お聞きしていて思いました。」

それぞれの方が大変な経験を積んでおられることも分かりましたし、それがつながってくる、と実感できたことが私には一番うれしいことでした。私たちが見たのは、スペインの中でも実はとてもいい事例だったと思います。オチャガビアで案内してくれた男の人が言っていましたね、『仕事が8時間、遊びが8時間、寝るのが8時間』って。でもあれは旦那さんたちで、奥さん達は14時間ぐらい仕事をしているんです。かならずしも口で言うほどうまく行っているわけではないんです。ということは、私たちも、必ずしもうまくいかなくてもいいんだと、思っているいろいろやってみる。その中でいろいろ見えてくるだろう、というぐらいの姿勢でやらないと、とてもしんどいです。だから、理念があっていいな、というの、ないよりあった方がいいですけど（笑い）、私たちも理念をもてるといういいな、という程度で始めてはいかがでしょう。都会の人の話が出ましたが、来られたらこんな風に出迎えてあげよう、と田舎では待ちかまえている。でも都会の人は、待ちかまえていてほしくないんですね。たとえば、放っておいてもらって、寝転がって本を読んでいられれば幸せ、そんな人もいます。私たちのスペインでの経験でも、朝、民宿を出るときに、芝生の丸テーブルのまわりで本を読んでいた4人のスペインの男性のお客さんが、私たちが山登りをして数時間後にもどってきたら、同じ姿勢で同じことをしていたんです。私や夫なんかは、こんなに自然がすばらしい、いいところに来たのにもったいない、と思うのですが、都会から来た人たちは、それが一番やりたいことだったんですね。いろんな面で、お客さんをよく見て、それに合った対応をする、ということが大切だと思います。自分たちのプライベートな生活もしっかり守って、お客さんにもしたいことをしてもらい、そのへんがないと続かないんじゃないか、と思います。例えば、私のうちでは、1階はお客様にお見せして、自由に遊んでもらいますが、2階はよほど親しくなっても見せません。ちらかし放題だからです（笑い）。そういう方法で、自分を保っているわけです。今日も、民宿の階下に住んでおられるということ、朝まで気づきませんでしたよね。そういう構造にできたらきっといいかな、と思います。別棟のところもあります。つまり、踏み込まれたくないところが、自分の中にもあるし、相手にもある。それを尊重し合いながら、ゆったりしたおつきあいができたらいいなと思います。私たちも、忘れてたり約束をやぶったりすることが多いんですが、よろしくお願ひいたします（笑い）。」

『よそ者、若者、ばか者』が集う場をあちこちにつくろう

安溪（遊）「中山さんが、コーヒーを飲む場所が10か所できた、とおっしゃいました。集まってコーヒーを飲みながら、時々はいっしょに立ち上がって、協同して何かを引き込むためのしかけを作っていくといいと思います。『いつもの人脈』だけでは狭いでしょ。それをちょっと角度を変えてみる。例えばこの際、生活改善士を500人呼び込んでみよう、とか、さまざまなアイデアもわくんじゃないか、と思うんです。また、徳地も人材・人脈、多士済々ですし、サポーターズは全県から来てるんです。仕掛け人も東京の日本総研のコンサルタントの金子さんという人がいたりします。ほとんどただで使えるものは、どんどんただで使きましょう！」

安溪（貴）「地域のこと外の人目で見ると、当たり前だと地域の人が思っていることが、実はとても新鮮だったりします。」

秋本「今は解散状態になっていますが、県庁の企画で『地域おこしマスターズ』たちが集まって相互に視察して、意見を言い合います。1年に2回か3回交流の機会がありました。これで地域の問題点を出し合って、きびしい意見も含めてアドバイスしあう。来年には、ぜひうちの所にも来ていただけたら、と思います。」

石丸「企業には、相互パトロールという制度をつくっています。安溪先生のような人を一人コーディネーターにして、相互に訪問して言いたいことを言い合う。よく言いますよね、『よそ者、若者、ばか者』が入ったらいい（笑い）。そういうグループがいいかもしれませんね。あまり頻度が高いと大変ですから、年に2回とかね。みんな弁当をもって行く。お茶ぐらいはだすけれど、お接待はしない。できる人だけ参加すればいいし、面白いと思います。そうしたら長くつづくんじゃないでしょうか。」

秋本「地域の資源を探すワークショップですね。それをカードに書き、KJ法でまとめて、将来のビジョンまでまとめてくれたことがありました。その中で、町の人の中には、農業体験なんかまっぴらごめん、寝転がってのんびりしたい、という声も多いんだよ、ということを教えられました。」

安溪（貴）「いろんな地域があって、いろいろな取り組みがあり、それが手を携えて、山口県全体で受け入れ体制を作っていくことができれば……。」

大学生のインターンシップ受け入れを

安溪（遊）「あ、言い忘れていました。うちの学校では、学生を地域に勉強に行かせるという科目はあるんですが、現状では、卒業に必要な単位にあまり入らないので希望者が年に10人ぐらいと少ないんです。ところが、来年度からカリキュラムを変えてほとんど必修にするというんです。すると大変なことになります。60人とかの学生を配らにゃいけんという事態になります。いい加減な学生を配れんし、またいい加減な受け入れ先でも困る。そういうことでございますので、みなさま、ひとつまたよろしく願いいたしまーす（笑い）。スペインへは、私費ですが営業もかねてまいっておりますので。」

石丸「地域に出て職場体験をした学生は就職しても定着率がいいらしいです。若者は働くということを知らない人がけっこういる。実際に働いてみて就職した場合には定着率がいいという結果がでています。ぜひ大学でもやられた方がいいと思います。今、私たちは新しいインターンシップの方法を模索中です。生徒も先生も満足していただいて、企業にもあんまり負担にならない方法はないか、私がレポートを書くことになっています。都会ではインターンシップにあまり気を使っていない。インターンが隣に座っていても、空気のような気がつかない感じで仕事をしている。これを手取り足取りで指導することはあまりしないです。ところが、われわれ仲間の中小企業に聞いてみますと、一日半ぐらい徹底的に教育したり、お客さん扱いをしているんです。それをやめたらうまくいくんじゃないかということレポートしようとしています。みなさんに、またご批判をいただけたら、と思います。」

報告を書いて「あなたとナバラ会」を発足させよう

石丸「帰国されたら2週間以内に、400字の感想と、自分が写っている一番気に入った写真を事務局に提出することになっています。それから、これは安溪先生の提案ですが、われわれ11人で何かもうすこし詳しい記録を残しませんか。こちらの方は言いたい放題、分量に制限なし、ということで書いてみてください。これはちょっと時間をおいて、1か月後ぐらいに出していただけたらと思います。ご自身が一番書きたいものを自由に書いてください。」

秋本「田植えがありますので、締め切りはなるべく遅めに設定してください。」

石丸「年に1回ぐらいは、相互訪問してみたい、という計画はいかがですか？」

秋本「同窓会みたいな感じで負担にならないように。あとは、ネットワークを生かして個人的に。」

5. いろいろ泊まり歩いた経験から——長期滞在の5人の座談会

旅の終わりの2006年5月25日、バルセロナのホテルの一室で反省会を催しました。司会は石丸さんです。

農家民宿は金太郎飴ではだめ

石丸「グリーン会の長期も、今日で最後になりました。短期の人たちと別れたあとの、後半3日間の感想を申し合いませんか。ナバラでのいただいたワインでも飲みながら。」

山本「後半の3日間にいろいろ見ました。多様性を踏まえて徳地の串でどんな農家民宿がいいか考えていくためのベースができたと思います。泊まった中では、ウルスカ民宿が一番印象深かったです。床なんか、古い檜の板でびかびか。建物の中が非常に印象的で、ただで満足できました。また、料理が非常においしかった。独特の素朴な雰囲気があって、主人なんかそうですし、もてなしの心というか、あたたかい受け入れがあったと思います。接する態度とか、一生懸命接してくれているのが、自然だった。こういうところなら、また来たいな、とみなさん思われると思いました。家の中に歴史の重みを感じさせる魅力がありました。かけがねひとつにしても。料理のおいしさ。サラダでもスープでも本当においしい。町から遠い、隣の家まで4キロあるという不便なところだけれど、それがまたひとつの魅力になっていると思いました。標高が高いところだから、景色もいいし、まわりに民家がない。あそこならではの雰囲気、それが魅力だし売りになっていると思いました。心と心のふれあいはどこもあつたんですが、とくにウルスカ民宿は、独特のものがあつた。私の徳地の串でやろうとすれば、ただの民宿ではだめだと痛感しました。独自の魅力がないとリピーターとして来てもらえない。」

石丸「都会で研ぎすましたような感性の人が田舎にきてやっているというのが、2番目のアララツ、3番目のアルギニャリツですね。徳地でやるなら1番目の農家のウルスカ民宿型でしょうか。」

山本「3番目の家はスペイン風の魅力と明るいご夫婦の雰囲気。あそこは行って楽しいという雰囲気でした。」

3か所の農家民宿を訪れて2か所に泊まった結論としては、それぞれのところがそれぞれの個性を打ち出しているということです。金太郎飴ではだめだということを感じました。自分が自信をもったものかどうかが分かれ目になります。徳地の串でやるとしても、それぞれの宿がまったく同じものでないほうがいいと思います。そうしないとリピーターがとれないし、生き残れないでしょう。安心院なんかは、その家の魅力でひっばっている。しゃべりっぱなしのおばあさんとか。独自性があることが大切だと気づきました。3か所、それぞれ全部ちがうよさがありました。」

福田「Iターンの人の自然志向型民宿と、地の人の農家型民宿がありました。健康志向と自然エネルギーの活用で特色を出していましたね。農家をやっている人は、後継者不足など徳地と同じ問題をかかえていることに気づきました。田舎に活をいれる、お金を導入する手段として、農家民宿の導入があるわけです。古い形の家をよさを生かして、伝統の調度品を大切にしています。昔の生活を知るのにも最適じゃないかと思いました。」

それと、ウルスカに行く前に訪ねたベルティツのお殿様の森。あれが自然の山の姿かとたいへん印象に残りました。倒れたブナの姿。そこから1年生、2年生と各世代が生えていて、そこに寝転んで眠ったこと。たいへん印象に残りました。たぶん一生忘れません。」

これからは健康指向・自然志向で

福田「ウルスカでは、牛糞堆肥をつかった野菜が、非常においしかった。ホテルの食事とは大違い。子どものころに食べたおいしい野菜を思い出しました。無農薬・有機の味と思います。」

山本「スペインの農家民宿の歴史は、ドイツなんかのように古くないようです。これからは、健康住宅タイプがのびてくるのではないかと思います。」

安溪(貴)「ウルスカは、古い農家であるだけでなく、

健康住宅という特長ももっていますね。]

山本「2番目のアララツ民宿は、独自のものがあります。主人のパッチさんの哲学というか、すごいこだわりのある部分で、魅力を作っています。日本はそのレベルまでいっていないのだけれど、そういう独自性があります。主人が話されたなかに、そういう人間にとっての健康に配慮した住宅ということがあるのだというひとつの考え方が確立されていました。また、インターネットを有効な宣伝の手段として客をつかまそうとしているということを感じました。]

福田「アララツ民宿のパッチさんの風水と健康住宅のメッセージ。いい記念になりました。]

安溪（貴）「あれも、客が要求しなければ、あんな話が出さないんです。]

安溪（遊）「自然住宅建築の相談に乗る時の道具キットというのを見せてもらいましたが、あれが面白かったですね。まず、予定地の環境をつかむということで、ガンマ線の放射能レベルをはかります。次いで電場・磁場の強さをはかり、携帯電話や電子レンジに使われるマイクロ波です。もちろん、強すぎるところは避けます。そのあと、地下の水脈を見るんですが、これが伝統的な方法で、L字型をした金属の棒を2本、右手と左手で軽く支えて歩くと、あーら不思議、棒がぐるりと回転するところがあります。僕らもやってみましたが、目をつぶって歩いても回る場所がありましたね。その下には水脈が走っているんだそうです。そして、たくさん水脈が集まっているところは『気』というかエネルギーが高いそうで、そこにベッドを置くと安眠できないというんです。逆に教会なんかはなるべく多くの水脈が集まるところに建てるのが伝統だそうで、フランスのシャルトル大聖堂なんかは、14本の水脈が集まっているとか言っていましたね。]

山本「ああいう話の展開になって、アララツ民宿の特徴ができましたね。それがないとただ泊まっただけ、になりかねませんでした。]

安溪（貴）「あの朝は、朝食をいただきながら奥さんのアルベルタさんと話していて、それなら夫のパッチを呼んで話してもらおうということになったんです。]

福田「ナバラでの風力発電の普及に感心しましたし、それがアララツ民宿の経営方針にも影響しているなど思いました。]

継続的に支援するシステム・人がほしい

石丸「私は、行政と民宿経営者と訪問客の立場から考えてみました。行政側から言うと、グリーンツーリズムの開拓者であるハビエル・ブリエバさんとか、オチャガビアで案内をしてくれた男の人のような支援者が非常に一生懸命やろうとしているのが伝わります。日本には、長い目で支援していくというシステムがない。徳島県の上勝町で料理に添えるつまもの流通の『葉っぱビジネス』をやったところも、JAの人が何十年も取り組んでいる。四国の馬路村の柚子の例も同じです。工業でいうと、浜松で昇進しないまま何十年もやった人がいてうまくいった。自分をわすれて一生懸命やり続ける人がいて、はじめてうまくいくんです。徳地でも役場で達人塾の世話をしてくださっている柏木さんがせめて10年ぐらいやってもらえれば。]

安溪（貴）「それは長くても3年で担当が変わるという今の役所のシステムの中ではまったく無理ですね。]

石丸「官立民営でいいんですけど、助言してくれる窓口がどうしても必要です。徳地でそういう人を見つけること、それがひとつ。それをサポートする人、たぶん3人か5人でも大きな力になります。民宿を見るとやはり女性ですね。いかにお客さまへのもてなしの気持ちを伝えられるかです。山口県にきた人が70歳の女性の接待が忘れがたいというんですね。そんなものなんですね。そして、40代ぐらいがほしい。50代の前半でもいいです。定年後の人ばかりではパワー不足でしょうね。]

山本「申の農業を支えているのはもう80%高齢者です。高齢化率を計算したら、60歳以上が71%という状態。3年前に調べたときは58%だったんですから、ものすごい上昇率です。]

安溪（貴）「ナバラのカサ・ルーラルのお手本のようなウルスカ民宿でも、後継者問題はあります。10キロはなれたエリツォンドの町で娘さんが新しいカサ・ルーラルを開業しているんですね。今のところ、娘さんがウルスカ民宿のあとを継ぐとは言っていません。]

山口型農家民宿を考える

福田「今回訪れた農家民宿は、みんな設備がすごくて圧倒されました。あまりにもできすぎたところを訪れたので、資金的にも、準備としてもとてもすぐにはできないなあと感じてしまいました。」

安溪(貴)「それは、ナバラでは20年かけて、当初4割もの補助金で充実させてきたという違いもあります。」

福田「山口では必ず水洗にしなくても、ぽっとん便所も悪くないと思いますよ。実は私は、3つぐらいの時、便所に落ちたことがあるんです。夏でよかったです。川に持って行って洗ったといいます。それで僕は運が良かったですね(笑い)。」

安溪(貴)「去年、最後に泊まったフランス国境のバスク州の町イルンのはずれの農家民宿は、独立した台所が使えて、言えばワインも安くわけてもらえましたし、台所のりんごやナッツも自由に食べてよかったですけれど、こちらが頼まなければ何もでてこない。それでも冷たくは感じないという、ほどよいサービスをしてもらえたと思います。」

福田「ナバラとここバルセロナをくらべると自然環境もずいぶん違いますね。建物なんかまったく違うと言ってもいいでしょう。ナバラはずいぶん伝統を重んじていると思いました。それに引き替え、日本では建て替えをしていくということが一般的なんですね。」

石丸「山口の昔の農家は8部屋ぐらいあります。だから何部屋かを民泊にとって、そこで暮らせるように改造する。自分の家を生かす方向でやればそれほど費用もかからないでしょう。長屋(農家の別棟。納屋。作業場)を改造すれば、ここの民宿のようになりますよ。」

福田「土蔵を改造するのはいいと思います。うちらでは長屋は、蔵的なものですから。」

石丸「あるコンセプトで農家の物置である長屋の2階を改装すれば費用もあまりかからないのでは。安い費用でサービスを提供できるかどうかということです。それには、改装だって例えば100万以下でできる道をさがさないといけませんね。というのは、大阪の人は、東京の人のようには田舎でお金を使わないという調査結果があります。値段が高ければ来ません。」

お客様の質も、現状ではスペインと日本ではずいぶんちがいますね。将来的には似てくるにしても、いまはまだ日本ではベジタリアンについてもそんなにめだたない。『自分には帰る田舎がありません』という人が日本ではすごく増えていますけれど、それをうまく徳地にひっばってこれるかどうかは疑問です。

短期の反省会でも言いましたけれど、スペインだけが観光で成功して地元がもうけている。ヨーロッパで、里の人气が高まっているんですね。徳地はどこをターゲットにするのか。お客様の要望をきちんと聞いて進めることが必要だと思います。」

安溪(貴)「田舎は、都会とは時の流れがちがいますから、それを味わってほしいですね。」

福田「バカンスの形の違いはありますね。長期の休みを田舎で、ということは日本ではまだ難しいかもしれません。それでも、受け入れる側がそれほど手をかけずに、お好きなように過ごしてください、というタイプ。家族もいっしょという型が日本の主流だったら、そこまで保証できるかも。」

自然なもてなしの心を育てるには

山本「申で子どもたちを受け入れた時には、すごくうまくいき、今でも交流が続いています。子どもたちが『山本さんに会いたくて来ました』といって、また訪ねてくれたんです。すごくうれしかったです。弟もつれてきました。今度は友達もつれてきていいですか、という風に聞いてきました。そうなればうれしいし、関係がどんどん育っていくんですね。グリーンツーリズムの発表のための企画書には、都会から大人の人たちを呼ぶというように書きましたが、それとはちがって、ぼくの思いは前にきてくれた子どもたちに手紙を書いて、泊まってもらおうかと思ったんです。」

福田「ほかの家でも子どもがきて泊まっています。泊めてあげた人からは、お礼状が来たり、今でも年賀状が来たりします。」

石丸「田舎では戦争中に疎開の子をうけ入れていたね。僕もドイツとスウェーデンからのお客様を受け入れたことがありますが、すごく疲れしましたね。」

福田「妻の親の葬式の翌日に、東京の客をたくさん串に受け入れることになったことがありました。これは

つらかったですね。]

山本「東京からのお客を受け入れたときは、みんなすごく疲れて、もう今後はこういう取り組みは無理だ、と多くの人言うようになりました。子どもを受け入れた経験を生かして、新しいグリーンツーリズムの串型のものができるかと思ったんですが、実際にはうまくいかなかったんです。]

石丸「ボランティア精神だけでは、続けていけません。成り立つためには、収益ができるような構造にしていくことが大切です。それを通して、高齢化が止まるようなものが見つかるような取り組みをしたいところですね。串の300メートルもある高地であることを生かした特産品をみつけてほしいです。]

安溪（遊）「山口県の農家民宿第一号の阿武町の白松さんは、もともと博多の筥崎の人たちとの交流があって、その結果として民宿が生まれたんです。]

山本「本当に心から受け入れてくれないと、リピーターなんかにはなりません。]

安溪（貴）「こんどの旅にこられた女性たちは、みなさん何らかの形で客を受け入れた経験がおありなんですね。このたび見た、アララツとアルギニャリツは、しっかりした意見をもった夫と、それをサポートしていく妻という組み合わせでしょうか。]

山本「実は、僕は家内にグリーンツアーのことはひとつもしゃべってないんです。]

安溪（貴）「まず、奥さんやだんなさんをいかに巻き込むかがとても大切です。みなさん、今度はスペインにご夫婦同伴でいらっしゃるのが宿題ですね!」

6. ともに地域の歴史をつくる仲間になりませんか

——山口型グリーンツーリズムのあらたな展開

今回のナバラ行きはナバラの農家の方々との交流だけでなく、100人もの元気な山口県民のみなさんとの心の絆を深めるまたとない機会になりました。たくさんのお出会いと思い出の余韻を残して、ナバラから帰国した私たちグリーン会は、「グリーンツーリズムの導入によって田舎に元気を!」を目標にし、「みんなを巻き込んで楽しく」をモットーにしています。ここでは、

山口にもどった2000年6月以降のご縁の広がりや深まりをご紹介します。

ひとつ目は、わが家の遅い田植えを終えたあとの6月23日に山口市の安溪の自宅に集まっていたきました。三嶋、中山、山本、福田、木村、池田、石丸、安溪（貴）、安溪（遊）の9人が集まりました。写真の上映会で思いっきり笑い、今後も年に一度は集まろうと約束しました。「あなたとならば（どこへでも）」という洒落もかねて、今後、会の名前としては「あなたとナバラの会」を使うということになりました。

二つめは日本海側の阿武町福賀地区には「あったか村」という、里と町を結んで、「都市型のライフスタイルからの乗り換え駅」を目指す地域づくり拠点「あったか村・福賀」という団体があります。そこでの行事のひとつが、スイスチーズ士の資格をもつプロに教わる本格的な「チーズづくり講習会」です。

私どもが「あったか村」の世話役であることからつながりがついて、2006年8月5日（土）には、子ども2人を含む27人が山口市徳地八坂の八坂公民館（むすびの里）に集まって、徳地でのチーズづくり講習会が催されました。主催は、安溪遊地が塾長を命ぜられている徳地づくり達人塾の中の「美味しいもん隊」と、あったか村の共催で、実技と理論を交えながら、全部で3種類のチーズを作りました。うれしいことに、ナバラにごいっしょした池田静枝さんが、ご自分の牧場の牛乳をもって防府市から駆けつけてくださいました。宇部や岩国からの参加もあるという大盛況で、楽しくて美味しく、チーズ作りだけでなくヤギのミルクの試飲とかの珍しい体験もできて、おもしろい人たちと出会えるという贅沢な集まりになりました（<http://tokudi.jp/?n=40>）。

三つ目は、10月になって、下関市で「グリーン・ブルーツーリズムシンポジウム」というのがあったので、安溪遊地が招かれてパネラーとして山口からのナバラ訪問の報告をさせていただきました。熊本県人吉市で郷土の家庭料理「ひまわり亭」を地域の女性たちのパワー全開で展開している本田節さんのお話しは、九州での先進的な取り組みについてのよい勉強になりました。パネラーとして登壇したのは、江島潔下関市長と、山口県の農家民宿第一号の白松博之さん（阿武町福賀・あったか村代表）と、同じく阿武町の漁家民宿の茂刈達美さんと安溪遊地で、おたがいに、あったか村の仲間であり、県立大学の講義への出演をお願いしたりもしている旧知の仲でした。このたいへん充実した勉強会のしかけ人は、実はナバラにごいっしょし

た中山淑子さんだったのです。

山口県も、今年から本気をだして中山間地の元気を取り戻すための方法のひとつとしての「ふるさとツーリズム」に取り組んでいて、阿武町、長門市俵山温泉、周防大島の3か所をモデル地区に指定して、高校や大学と地域が連携するという事業への予算を組みました。そこで、この事業の応援を受けて、県立大学の「環境問題」という授業に来ていただいている白松さんのところを、地域からの参加者を含む受講生と訪れる、という計画をたてました。「山口県初の農家民宿『樵屋(きこりや <http://www.haginet.ne.jp/users/kikori/>)』を訪ね、地域の食材を試食。そのあと、村づくりの現場で、ヤギと遊んだり、さわやかな秋の1日を、やまぐちの元気な地域にでかけ、味わいませんか。」こんなふうに呼びかけて、11月18日、大学のバスを出していただいて、20人あまりの参加者でバスツアーを実施しました。

広域合併した萩市のだ真ん中であって、合併しない道を選んだ阿武町。役場の佐村さんから、阿武町のグリーンツーリズムへの取り組みについてうかがいました。その場での白松さんのメッセージが心に残りました。「大学生のみなさんが、ここへ来てくださって、とらわれのない新鮮な発想でいろいろおっしゃってくださると、田舎に住むわれわれとしてはそれが大変に参考になる点が多いんです。しかも、大都会や合併した大きな町での発言と違って、私たちのようなところなら、あなたのその声が、実際の施策に反映される率もスピードも段違いです。どうか、私たちとっしょにここの歴史をつくる仲間になってくださいませんか。」

小雨の中、100ヘクタールという広大な共同農地「埋もれ木の郷」を経て、白松さんの白菜畑のある西台という高台にいたりしました。ちょうど白菜の箱詰め作業中で、箱の運び出しをお手伝いすることにしました。ところが、体を動かし始めると学生たちは俄然楽しくなってきたようで、重い白菜に転びそうになったりしながらも、笑い転がっていました。おみやげに、規格外の白菜をいただいて、白松さんの農家民宿で地域の食材を生かした羽釜と薪でいただいたご飯と野菜のお汁などの昼食。あったか村にも足を伸ばしましたが、残念ながら活動に参加するには時間切れとなってしまいました (<http://www.haginet.ne.jp/users/poco-a-poco/>)。

寒い中、心があたたかくなる充実した1日の滞在の終わりに、参加したみなさんの意見を聞いたところ、漁船の船員からたたき上げて船長となって、30年世界をまわり、定年を迎えてから山口高校(通信制)、県立大学と進学した高山さんは、白松さんの農家民宿でと

ても大きなショックがあったといいます。それは、「スーパーなどで買ったものを常日頃たべていますが、あんなに美味しい食事をいただいた経験がちょっと記憶にないんです」ということでした(写真49-52)。

その後、「環境問題」科目のレポートとして提出されたものの中に、この時の訪問を取り上げたものが複数ありましたので、抜粋してご紹介しておきましょう (<http://ankei.jp/yuji/?n=289>)。

レポート1. 阿武町こそ私たちの「ふるさと」

「あったか村は化学物質過敏症の人でも住めるような環境であった。家も自分たちで建てたのだ。ここで面白いことがある。窓のサッシに合わせて家を建てるといふことだ。窓のサッシを壊す家から貰ってきているということでそれを再利用する、というリサイクルも行われている。あったか村が目指しているものは、人の健康・地域の健康・地球の健康である。あったか村は物をリサイクルして家を建て、人の健康を考えながら家を建てている。こんなに健康に気を使っている場所は他にあるだろうか。

実際に行ってみて、人の温かさというものを感じた。本当に温かい方たちで、初めて行った私でも前にあったことがあるような感じになった。本当に自然が大好きなんだということが伝わったような気がする。

あったか村のある阿武町では、体験交流もできる。農家に泊まったり、漁家に泊まったり、パンを作ったり、フラワーアレンジメントができたり。他には、日本の四季を感じることができる季節別の体験ツアーなどがある。都会に住んでいれば絶対に体験できないことばかりである。

現在の日本はとても便利になっている。しかし『人のふるさとはどこ?』という問いかけに私たちは答えられるだろうか。今の日本は上京後の場所であるように私は思う。ではふるすとは何処なのだろうか。まさに阿武町こそが『ふるさと』という言葉に適している場所ではないだろうか。人の健康・地域の健康・地球の健康の大切さを知っている阿武町、四季を感じ体験できる阿武町こそが私たちのふるさとではないだろうか。」

レポート2. 不便でも山口県の田舎に住みたい

「私は、環境問題の授業を通じて、田舎の環境に対する考え方が大きく変わった。私は周南市のなかでも比較的山の多い地域に住んでいて、近くには畑や田んぼがあり、空気もきれいなところである。長い間そのよ

うな環境で育ってきたせい、交通の便が悪いことや衣料品を買う場所が遠いなど、不便な面しか見えなくなってしまう。また、この先山口県にとどまらず、将来は福岡や広島など、もう少し都会に住みたいと思っていた。しかし、この環境問題の授業で自然の中で生活すること大切さを感じることができた。そのなかでも最も影響したのが白松さんの家を訪問したときである。

白松さんの家にお邪魔して、釜で炊いたご飯や野菜たっぷりの味噌汁をいただいたりしたことももちろんであるが、人間が開発してきた機械の少ない、多くの自然に囲まれた中で一日を過ごして、確かに移動するときなど多少の不便はあるけれども、自然に囲まれて暮らすことがとても素晴らしいと思うようになった。また、大きな畑の中で、きれいな空気を吸って、多くの自然の中で過ごしている間、自然と寒いことも気にならず、とてもリラックスした開放的な気分になっていた。

今回白松さんの家や畑を訪ねて、やはり、自然の中で生活することが、人間にとって最もよいことであると思った。もっと自然に目を向けるべきであると思った。自然の中で暮らすといっても、今の生活を180度変えるというわけではなく、身近にある無駄をなくしていくことから始めればいいのではないだろうか。……今の生活への利便性ばかりを考えず、将来のためにも、今の生活を見直し、自然と共存していけるような生活を目指すべきであると考えている。

こうしたとりくみが、今後とも、地域と学生たちとの息長い交流のきっかけとなることも期待されました。阿武町には、漁家民宿もできています。その次は、周防大島にも足を伸ばしたいし、ナバラからの農家民宿訪問の受け入れもできればいいな、と夢はふくらむばかりです。

今後の情報は、<http://ankei.jp>で「ツーリズム」を検索してください。イベントなどの問い合わせのメールをくださる方は、y@ankei.jpまで。

謝辞

今回は、100人を越える訪問団の送り出しと受け入れのために、山口とナバラ双方の数え切れないほど多くの方々のお世話になりました。特に、出発直前になってもスケジュールの詳細が決まらない「グリーン会」に振り回された山口県国際交流協会のみなさまのご心痛はなみだいていものではありませんでした。現地

での農家民宿への受け入れの手配の一切をしてくださった、Javier Brieva Yoldi 氏には、心から感謝したいと思います。

引用文献

安溪遊地・安溪貴子、2006「スペイン北部の山村の風土を生かして——ナバラ自治州で出会った持続可能な暮らしへの挑戦者たち」『山口県立大学大学院論集』第7号

山口県・ナバラ州友好訪問団実行委員会、2006『山口県・ナバラ州友好訪問団 スペイン・ナバラ州訪問記』山口県・ナバラ州友好訪問団実行委員会

引用ウェブページ（スペイン語）

ナバラ州内のカサ・ルーラル案内（予約も可能）

<http://www.casasruralesnavarra.com/>

アルギニャリツ村・健康住宅づくりの学校

<http://es.geocities.com/escuelabioconstruccion/>

ウルスカ民宿

<http://www.urruska.com/>

パッチとアルベルタのエネルギー自給民宿

<http://www.kaanoetxea.com/>

花の農家民宿・ロレチェア

<http://www.loretxea.com/>

引用ウェブページ（日本語）

山口の農家民宿の第一号・阿武町福賀の「樵屋」（きこりや、電話08388-5-0138 FAX 08388-5-0582）

<http://www.haginet.ne.jp/users/kikori/>

山口の漁家民宿・阿武町尾無漁港の「浜の小屋」（電話FAX08388-4-0535）

http://www.haginet.ne.jp/users/abu-hot/tokusyuu/01_hamanokoya.htm

あったか村・福賀

<http://www.haginet.ne.jp/users/poco-a-poco/>

徳地づくり達人塾

<http://tokudi.jp>

安溪遊地・貴子のウェブページ

<http://ankei.jp>



写真2 ナバラの農家民宿の開拓者たち
(左端がハビエル・ブリエバ氏)



写真5 花の宿のテーブル (中山さん撮影)



写真3 ナバラ州作成の観光用資料をいただく



写真6 花の民宿の作業場 (中山さん撮影)



写真4 よく冷えた果物のリキュールのもてなし
(中山さん撮影)



写真7 花の宿のおみやげ (中山さん撮影)



写真8 農家の食堂でくつろぐ (中山さん撮影)



写真11 イスコ風車公園にて訪問団一行



写真9 麦畑の雑草が美しい (中山さん撮影)

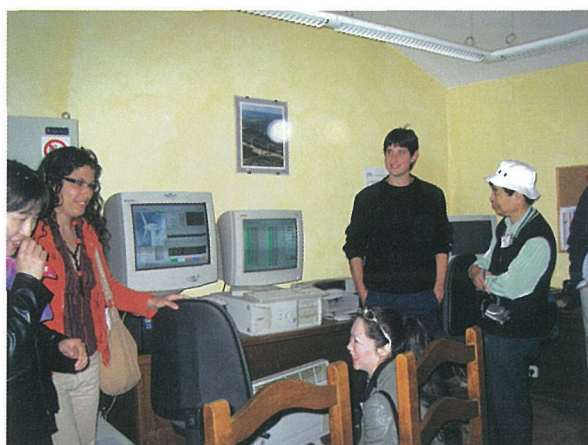


写真12 大風車群の制御室にはパソコンが2台あるだけ



写真10 ブドウ畑にたつ山口の農家の女性たち



写真13 勇壮なバスクの伝統芸能を見せていただく (オチャガビア村)



写真14 民宿から見たオチャガビア村の風景



写真17 オチャガビアのリンゴ酒レストランでの夕食



写真15 オチャガビアの観光資源についての説明を受ける
(中山さん撮影)



写真18 厚さ6センチもある去勢牛のステーキを2枚勧められる
(中山さん撮影)



写真16 オチャガビア村の教会のミサに参列 (中山さん撮影)



写真19 オチャガビアの朝食風景



写真20 サビエル城での公式行事に参加 (中山さん撮影)



写真23 ウルスカ民宿の野菜サラダ



写真21 ウルスカ民宿遠景



写真24 このスープはぶちうまいよ！



写真22 インターネットでヨーロッパ中から予約が入るウルスカ民宿



写真25 福田さんの手作り竹とんぼを飛ばす男の子



写真26 ウルスカ山を望む



写真29 山中に家が点在する風景 (石丸さん撮影)



写真27 大きなブナの木と再会 (石丸さん撮影)



写真30 エネルギー自給民宿訪問



写真28 森の中で食べて笑って昼寝を楽しむ



写真31 仲良く草をはむ馬と豚



写真32 廃村から復活したアルギニャリツ村

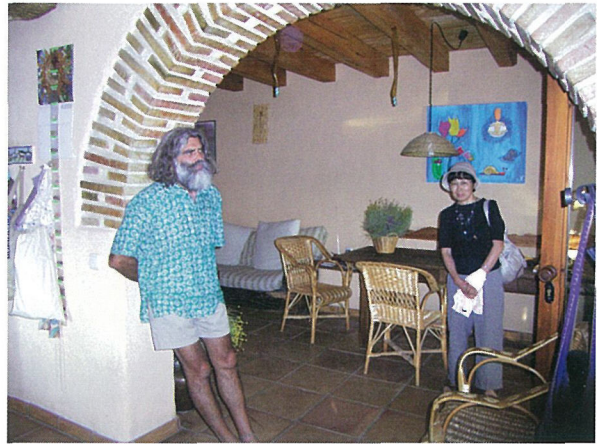


写真35 薪の壁暖房の家は暖かい



写真33 アルギニャリツ村からの眺望（石丸さん撮影）



写真36 冬に備えて薪を積むクリスチーナさんと



写真34 馬に水をやる建築家のファン・ルイスさん



写真37 太陽エネルギーの活用



写真38 サクランボの匂を味わう (石丸さん撮影)



写真41 昼食に招かれて

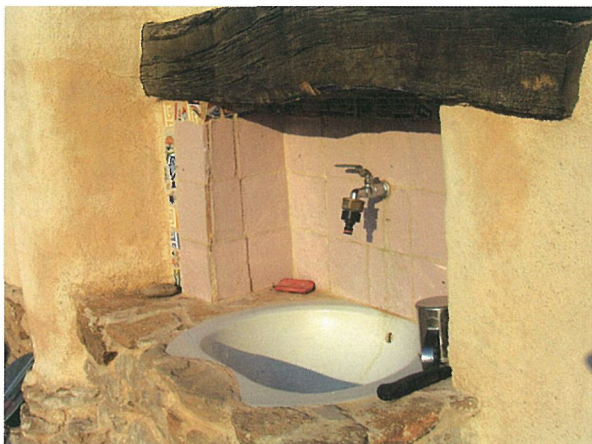


写真39 外の手洗いがかわいい



写真42 食事はベジタリアン



写真40 暖かい雰囲気の台所

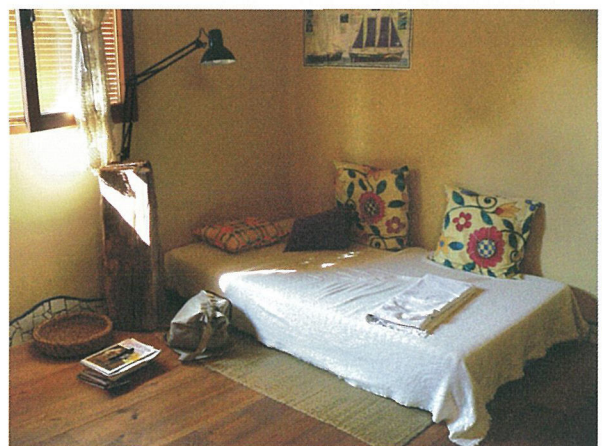


写真43 昼寝することを勧められた



写真44 廃屋を4年かけて改築して民宿をつくる

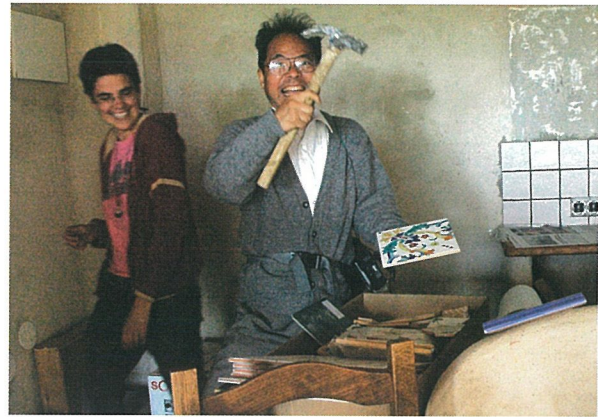


写真46 民宿の台所に張るタイルを割るお手伝い



写真47 サラさんの宿の完成まであと2年



写真45 古くても生かせるものは極力生かす



写真48 巡礼の要所プエンテラレイナ（女王様の橋）



写真49 あつたか村・福賀を訪ねた山口県立大学の学生たち



写真51 農道をたどる



写真50 白菜の収穫を手伝う（阿武町）



写真52 農家民宿「樵屋」での食事